令和７年度入学試験問題

英　　語

注　意　事　項

1. 試験開始の合図があるまで，この冊子を開いてはいけません。
2. 問題は，１ページから12ページまであります。
3. 解答はすべて別紙解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
4. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入しなさい。

1 次の文章を読んで以下の問いに答えよ。

著作権保護のため問題文は省略してあります

注）immemorial：遠い昔の　sculpt：彫刻にする　prey：獲物
alloyed metal：合金　geologist：地質学者　geological：地質の
prehistory：先史時代　vegetation：植物
Stonehenge：ストーンヘンジ(先史時代の巨石遺構)
Wiltshire：ウィルトシャー(イングランド南西部の州)　glacier：氷河

問 1　下線部①を和訳せよ。

問 2　本文中の空所②三つに共通して入る最も適切な語句を，次の(ア)～(エ)のうちから一つ選び，記号で答えよ。

(ア) another　(イ) others　(ウ) the other　(エ) the others

問 3　空所ⓐ～ⓓを補うのに最も適切な前置詞を，それぞれ次の(ア)～(エ)のうちから一つ選び，記号で答えよ。ただし，同じものを繰り返し用いてはならない。

(ア) before　(イ) since　(ウ) through　(エ) to

問 4 下線部ⓦ～ⓩを置き替えるのに最も適切な語を，それぞれ次の(ア)～(エ)のうちから一つ選び，記号で答えよ。

ⓦ (ア) causes　(イ) graves
(ウ) outlooks　(エ) substances

ⓧ (ア) attractions　(イ) lands
(ウ) posts　(エ) qualities

ⓨ (ア) amount　(イ) deserve
(ウ) last　(エ) speed

ⓩ (ア) buildings　(イ) ideas
(ウ) marks　(エ) texts

問 5 本文の内容を表す記述として最も適切なものを，次の(ア)～(エ)のうちから一つ選び，記号で答えよ。

(ア) 人間と石には複雑な関わり合いがあり，石に対する人間の感情も複雑である。

(イ) 石の収集家と石を用いる芸術家は，石をどのように理解するのかについて一致している。

(ウ) 石を求めて世界中を旅する人がどうして石に魅了されるのかは，全くわかっていない。

(エ) 石を砕いて観察することで，石の形成された年代がわかり，当時の気候も明らかになる。

2 次の文章を読んで以下の問いに答えよ。

著作権保護のため問題文は省略してあります

注）lower：下げる　checkpoint：検問所　lament：嘆く
Monrovia：モンロヴィア（リベリア共和国の首都）　flyer：ビラ
Muslim：イスラーム教徒（の）　indigenous：先住民族の　alliance：同盟
lappa：西アフリカの女性用衣服　hymn：讃美歌　envision：思い描く
coexistence：共存　collective：共同の　quest：探求

問 1　下線部①を和訳せよ。

問 2　下線部②が次の意味になるよう，下記のすべての単語を適切に並べ替えて空所を補え。

「我々が何をしていたのかに気付いた報道機関はなかった」

doing	noticed	organizations	we	were	what

問 3　下線部ⓐ～ⓔを置き替えるのに最も適切な語句を，それぞれ次の(ア)～(エ)のうちから一つ選び，記号で答えよ。

ⓐ (ア) friendly　(イ) peculiar
(ウ) serious　(エ) usual

ⓑ (ア) adopted　(イ) attended
(ウ) financed　(エ) organized

ⓒ (ア) look closely　(イ) look happy
(ウ) say congratulations　(エ) say goodbye

ⓓ (ア) avoided　(イ) feared
(ウ) requested　(エ) told

ⓔ (ア) experienced　(イ) given up
(ウ) looked up to　(エ) reduced

問 4　次の(ア)～(エ)の文章のうち，本文の内容と適合しているものには○で，そうでないものには×で答えよ。

(ア)　WIPNET の活動を知った女性たちは，その趣旨にすぐさま賛同したため，当初から活動は順調だった。

(イ)　筆者らは，みずからの肩書や宗教の違いを乗り越えて団結するよう，女性たちに呼びかけた。

(ウ)　2002 年のデモ行進では，貧困層の救済策の一つとして，女性労働者の賃金引き上げが要求された。

(エ)　筆者は，友人らが殺されたことを知るたびに，次は自分かもしれないと恐れていた。

3 次の文章を読んで以下の問いに答えよ。

著作権保護のため問題文は省略してあります

注）thriving：急速に拡大する　　bragging rights：自慢する権利
acuity：鋭敏（えいびん）さ　　intuition：直感　　differentiate：区別する
flip：ひっくり返す　　reigning：タイトルを保持している
purposefully：意図的に　　the Great Depression：1929年からの大恐慌
pandemic：パンデミック（世界的な感染爆発）

問 1　下線部①が次の意味になるよう，下記のすべての単語を適切に並べ替えて空所を補え。

「人々がパズルをする理由は衝動以上に複雑なものではない。」

do	people	puzzles	reason	that

問 2 空所ⓐ～ⓒを補うのに最も適切な語句を，それぞれ次の(ア)～(エ)のうちから一つ選び，記号で答えよ。

ⓐ (ア) behind　(イ) ever
(ウ) later　(エ) since

ⓑ (ア) competators　(イ) competians
(ウ) competitors　(エ) competors

ⓒ (ア) as for　(イ) as though
(ウ) so as to　(エ) so that

問 3 空所Aを補うのに最も適切な文を，次の(ア)～(エ)のうちから一つ選び，記号で答えよ。

(ア) For some puzzlers, this trip to attend the championship represents the vacation of the entire year.

(イ) In August, she will begin preparing for the world championships.

(ウ) The scientists behind the discovery described the structures as sophisticated.

(エ) What makes a good speed puzzler?

問 4 下線部②が指し示しているのは何か。次の(ア)～(エ)のうちから一つ選び，記号で答えよ。

(ア) my opinion

(イ) a true champion

(ウ) the ability to self-control

(エ) the pressure

問 5 下線部③と同じものを表す語を同じ段落から一つ抜き出せ。

問 6 下線部ⓓ～ⓖに最も意味の近い語を，それぞれ次の(ア)～(エ)のうちから一つ選び，記号で答えよ。

ⓓ (ア) assumed　(イ) emerged
(ウ) evolved　(エ) recognized

ⓔ (ア) constitute　(イ) educate
(ウ) perceive　(エ) reside

ⓕ (ア) award　(イ) component
(ウ) effect　(エ) task

ⓖ (ア) confusion　(イ) harmony
(ウ) order　(エ) strength

4 文字によるコミュニケーション(written communication)と口頭によるコミュニケーション(oral communication)の最も大きな違いは何と考えるか。実例をあげて60語程度の英語で意見を述べよ。

令和七年度入学試験問題

国　語

注　意　事　項

一、試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
二、問題は1ページから13ページまであります。
三、解答はすべて別紙解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
四、解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入しなさい。

1

次の文を読んであとの問いに答えよ。（作問の関係で一部を変更したところがある）

古典をクラシックの訳語とするならば、そこで核心的な観念は規準とか範型とかいうことであって、時代的な古さは少なくも第一義的な意味を持ちません。これは「古典経済学」とか、「古典音楽」とか、それぞれの領域で、古典が帰属する時代がちがうのを見てもお分りでしょう。その意味では、江戸時代によく使われた「経典」とか「典範」というコトバの方が、「古」典というより、①クラシックの含意をヨリ正しく伝えています。ただ、一定の時間の風雪をくぐらなければ、規準や範型も確立しないので、その限りでは、時代的な古さということも通常クラシックにズイハン（ア）する要素といえます。すくなくも生れたてのホヤホヤの新刊や新作が、その瞬間にクラシックになるということはありません。

してみると、「古典離れ」の背景には②二つの要素の複合が推察されます。第一は、客観的な規準とか確立された形式というものが手応えのある実在感を喪失した、という問題です。第二には、新刊・新品・新型をたえず追いかけないと気が済まず、そうしないと「時代遅れ」になるという不安感です。こういう精神態度が、二つながら戦後日本において増幅されたのは確かですが、果してそれほど最近の現象でしょうか。「今時の若い者」に限られた傾向でしょうか。私は必ずしもそうでなく、これには長い歴史的・文化的背景があるように思えるのです。

そういう日本文化論をここで述べたててもキリがありません。［　i　］簡単に私の独断をいえば、第一の点については、そもそも文化に規準とか形式性を賦与（イ）したのは、古代では中国であり、近代では西欧だったという事情が挙げられます。学問にとっても芸術の上でも、範型という意味でのクラシックは、中国古典か、ヨーロッパの学芸でした。日本の「古典」は、むしろ昔の本――まさに『古事記』の題名がショウチョウ（ウ）するように「ふることぶみ」――という意味であり、それに一定の「典範」的性格を与えようという発想そのものが、中国古典によって触発されたものです。

［　ii　］客観的形式とか、典則とかいうものは、もともと外来だというところから、どうしても、そうした形式への反逆は、「外来」対「内発」という、論理的には別の次元の問題とワン・セットになりがちなのです。そうして、日本の内発性の探

究は、③無定形（アモルフ）なエネルギーもしくは「構成」以前の情念の流れへ行きつき、そこにお仕着せでない「本源的」なものを見ようとします。

形式への反逆は、いうまでもなく西欧ではロマン主義的思考の特徴ですが、日本では「三史五経のみちみちしきかた」④（紫式部）への違和感の方が先行しているので、極端にいうと、ここでは歴史的順序は古典主義からロマン主義へではなくて、むしろ「はじめにロマン主義ありき」ということになります。そういう由来のうえに、今世紀の世界的な傾向である客観的規準の解体という契機が重なり合うわけです。

もっとも、文化の範型が深く根を下ろしているところほど、「形式への反逆」もそれだけ全精神を賭けた冒険（エ）として行われるだけでなく、そうした反逆自体が古典に立ちかえって規準を再形成（リフォーム）する努力と結びつくのですが、「典範」が身に着いていないところでは、反形式主義はいとも手軽な衣がえ、もしくはストリップ礼讃（オ）としてあらわれる、というちがいはあります。同じ日本の歴史のなかでも、さきほど申した「経典」というコトバが比較的に定着する基盤があった江戸時代において、国学運動という思想的にも学問的にももっとも実り豊かな「　A　」が生れたのはゆえなしとしません。しかし、それがまさに「　B　」を清く去る」という、外来精神の排除と不可分に結びついていたのは御承知のとおりです。

以上は、古典離れの二契機のうちの「典」離れの文化史的背景ですが、「古」離れ――つまり最新流行主義――もまた長い由来があります。それは右にのべた日本の歴史過程と、一見矛盾しているようで、実は　I　の関係にあるのです。つまり、古代以来、日本が「先進国」――いうまでもなく、明治以前は中国、それ以後は欧米諸国――に追いつき追いこすために、時代の先端を行く文化や制度を吸収してきた歴史的習性に根ざしていて、「今時の若い者」どころか、戦後に限った現象ではありません。さきほどの「典範」としての中国文化や欧米文化も、すくなくも摂取した当時の意識からいえば、　a　としてでなく、　b　として輸入されたわけです。私は数年前に、日本の歴史意識のパターンの一つとして、不断に移ろい行く「いま」がその都度、視野の拠点となる「現在中心」志向を挙げたことがありますが、思想からステレオ装置にいたるまでの新製品好みもまた、戦後の状況におけるそうしたパターンの変奏でこそあれ、けっして突然噴出した現象とは思われないので

す。

前置きが長くなってしまいましたが、ここでようやく本題に入って、いま述べた古典と直接向きあうとはどういう事なのか、とくに⑤思想的古典への直接の対面にどのような意味があるのか、を考える段になりました。そういう問題を抽象的に論じても、説教調になるだけのことですので、以下、具体例に即しながら話を進めていきましょう。

私がここにサンプルとして選んだ古典は福沢諭吉の『文明論之概略』です。この書物を選んだのは、もちろん私自身が戦前から何度もくりかえし読んだ書物の一つだからですが、それだけではないつもりです。［ iii ］、福沢諭吉という人物は、それこそ「最新流行」の思潮から見ると、必ずしも評判のよくない思想家です。それに『文明論之概略』という題名そのものが、現代から見るといかにも［ II ］とした感じを与えます。「文明」というコトバはたんに古臭いだけでなく、科学技術のヘ(カ)ンチョウとか、物質中心主義とか、公害源とかいうはなはだ芳しくない連想と結びついております。それだからこそ、私はあえてこの思想家とこの書物をとりあげるのです。

古典を読み、古典から学ぶことの意味は――すくなくも意味の一つは、自分自身を現代から隔離することにあります。「隔離」というのはそれ自体が積極的な努力であって、「逃避」ではありません。［ iv ］逆です。私たちの住んでいる現代の雰囲気から意識的に自分を隔離することによって、まさにその現代の全体像を「距離を置いて」観察する目を養うことができます。

私たちは、どんなに自分では「自由」に思考していると思っても、現代の精神的空気を肺の奥底まで吸いこみ、現代の思考カテゴリをメガネとして周囲の光景を眺め、手近なところでいえば、現代の流行語を十分なギンミ(キ)なしに使って、物事を論じております。「反時代的考察」と称するものが、実はしばしば自ら意識しないで、時代の雰囲気にとっぷりと浸り(ク)、ステロ化された現代のイメージによりかかっているものです。日本のマス・コミや「論壇」のようにトピックの集中性が強い場ほど、そうなりがちです。現代の問題を中心とすること自体はそういう媒体の当然の使命なのですが、話題が刻々の「いま」に集中するほど、さきほどのべた、昔から日本にある思考の底流に乗って水勢を増し、滔々(ケ)として私たちを押し流します。そこで⑥古典の古

典たる所以をきわ立たせるためには、現代流行していない古典、もしくは不評判なテーマに関わる古典を例にとるのがかえって適切だ、というのが私の考えです。

いうまでもなく、『文明論之概略』の学問的研究のためには、維新直後の時代的背景とか、福沢が依拠したT・バックルやF・ギゾーとの関連とか、さらに福沢の全生涯とその思想の歴史的変遷とかいう問題のなかで、この書物を位置づけることが必要です。けれどもここでは、あくまで古典から学ぶための一つのサンプルとしてこの書物をとりあげるわけで、したがってそういう歴史的背景のせんさくを一まずヌキにして、読者とともにじかに原典にぶつかって行くことにします。

⑦古典にたいするこうした「直接の対面」という仕方には、しばしば歴史学者の側からの強い抵抗があります。およそ時代の歴史的諸条件の十分な理解なしにどうして福沢の書物と思想とを語れるのか、という疑問が、歴史家のほとんど間髪をいれない反応です。商売柄もっともであり、また古典の歴史的理解のためにはもちろんのこと、古典の内容の解釈のためにもそうした知識があるに越したことはないでしょう。

けれどもサンプルを変えて、［　　V　　］『論語』とか、プラトンの『国家』といった思想的古典をとってみると、歴史的諸条件とか社会的基盤とか言っても、それほどはっきりしたものでないことが分ります。春秋戦国時代の中国とか、紀元前四世紀ごろのギリシャの都市国家について、現存の史料でどこまで経済的基盤とか支配関係の実態が解明されるでしょうか。孔子やプラトンの生涯さえ不明なことが多いのです。にもかかわらず、『論語』にしろ、プラトンの対話篇にしろ、格別立入った歴史的基盤を問うことなしに何千年も読まれ、語りつがれ、そういう仕方で影響を与えてきたのは厳然たる事実です。アテネの民主政はドレイ制のうえに立っており、現代民主政とはまったく「歴史的条件」がちがうにもかかわらず、プラトンやアリストテレスは、ヨーロッパでもアメリカでも、デモクラシーを論ずる場合に相変らず引照基準になっています。第一、「古典的」思想家自体が、彼らと時代を隔て、産地も異った古典と取り組むことで自分の考えを練り上げてきました。J・J・ルソーは彼より一世紀前のイギリスの歴史的＝社会的条件などということをヌキにしてT・ホッブズと直接に対話し、ルネッサンス・イタリーの政治的状況について特別に史料のせんさくをしないでマキァヴェリの命題から学んだにちがいありません。どうして

同じような、敢えていえば超歴史的な（正確にいえば長歴史的な）学び方が福沢についてできないのでしょうか。

（丸山眞男『「文明論之概略」を読む』より）

問一　傍線部ア～コの漢字の読みをひらがなに、カタカナを漢字になおせ。

問二　空欄ⅰ～ⅴに入る語句を次から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア　なにより　イ　つまり　ウ　むしろ　エ　たとえば　オ　ただ

問三　空欄Ａに入る語句を文中から六字で書き抜け。

問四　空欄Ｂに入る語句を次から選び、記号で答えよ。

ア　やまとごころ　イ　まごころ　ウ　からごころ　エ　したごころ

問五　空欄Ⅰ・Ⅱに入る四字熟語を次から選び、それぞれ記号で答えよ。

Ⅰ　ア　一蓮托生　イ　呉越同舟　ウ　表裏一体　エ　唯一無二

Ⅱ　ア　時代錯誤　イ　荒唐無稽　ウ　勇往邁進　エ　古色蒼然

問六　空欄ａ・ｂに入る語句を次から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア　時代精神　イ　理念型　ウ　最新モデル　エ　プロトタイプ　オ　伝統文化

問七　傍線部①について、この具体的な中身を表す語句を文中から十二字で書き抜け。（。、「」なども一字とする）

問八　傍線部②について、これらを簡潔に表現した語句を文中からそれぞれ八字と六字で書き抜け。（。、「」なども一字とする）

問九　傍線部③について、これと同じ状態を指す表現を文中から十三字で書き抜け。（。、「」なども一字とする）

問十　傍線部④について、これを文意に即してわかりやすい現代語になおせ。

問十一　傍線部⑤について、これによって最終的にどのようなことが可能になるか、適切な語句を文中から二十五字で書き抜け。（。、「」なども一字とする）

問十二　傍線部⑥について、このように著者が考えるのは根本的にどのような事実があるからか、文中の言葉を用いて八十字程度で説明せよ。（。、「」なども一字とする）

問十三　傍線部⑦について、これにもかかわらず著者が自分の主張を曲げないのはなぜか、文中の言葉を用いて六十字程度で説明せよ。（。、「」なども一字とする）

2

次の文を読んであとの問いに答えよ。（作問の関係で一部を変更したところがある）

ここで、①日本人の現実感覚の根底にある、無常という問題について考えてみたい。

あらためていうまでもなく、無常という考え方や感じ方は、われわれのごく日常的なものの考え方や感じ方に深く滲み込んでいる。たとえば、われわれは日常語で「どうせ」という言葉をよく使うが、これは、結果の先取り思考であって、まだその時点に達していないにもかかわらず、現時点で、その結果となるであろう状況を先取って受けとめ、それを感じとって生きるという発想形式である。それは日本人に伝統的な無常感の著しい特徴のひとつである。こころみに、『古今和歌集』から二つほど歌を引いてみよう。

A　神なび山のもみぢ葉に思ひはかけじ移ろふものを　（詠み人知らず）

B　光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ　（紀友則）

ここでこの歌人たちは、今、現に真っ赤にもえたつ紅葉や満開の桜花を目の前にしている。しかしそれらを眺めながら、いやいや、思いはかけまい、いかに思いをかけてもいずれは移ろい散ってしまうのだから、と嘆いてみせているのである。まさに②「どうせ」の発想そのものであろう。そして、この「どうせ」と先取られる結果は、かならずや、否定的・消極的な結果である。「どうせ成功する」とは言わない。「どうせ失敗する」であり、「どうせ死ぬ」である。

つまり、その先取りされる結果までの「移ろ」いゆく時間は、上昇でもなければまたニュートラルな時間推移でもない。それは、有るものは無くなり、盛んなものは衰えるといった、かならずや暗転する時間であり下降する時間である。日本人の無常感において看取される時間とは、まずはそうした時間であることを確認しておこう。

「どうせ」という言葉を使う背景には、また一般的に日本人の無常感の背景には、このような時間感覚があるが、そこから次

のような現実感覚のあり方はヨウイ(ア)に導き出されてくる。

世の中は夢かうつつかうつつとも夢とも知らずありてなければ　（詠み人知らず『古今和歌集』）

夢や夢うつつや夢とわかぬかないかなる世にか覚めむとすらむ(b)　（赤染衛門『新古今和歌集』）

現とも夢ともしらぬ世にしあれば有りとて有りと頼むべき身か　（源実朝『金槐和歌集』）

ある（有る）ものはかならず無くなる、盛んなものはかならず衰えるという思いは、今あるものは本当にあるのか、夢ではないのか、幻ではないのか、といった思いを引き起こす。問題は、ひとえに、この「ありてなければ」という現実感覚にある。それは、いくら「ある」と力もうとも、その「有」はやがて無くなるという「無」に足元をすくわれてしまう「どうせ」の感覚なのである。

その意味で、「現つ」の「うつ」と「移る」の「うつ」が語源として同根だとされること（『岩波古語辞典』）にはきわめて興味深いものがある。「現つ」とは、そもそも「移」ろいを同義的にふくんだ言葉としてあるということである。

③同様の事情はさらに、この「現つ」という言葉の用法自体においてもうかがうことができる。「現つ」という言葉は、今引いた歌でも「夢かうつつかうつつとも夢とも」「夢や夢うつつや夢と」と、定型的に表現されていたように、すでに「《古今集の時代から「ゆめうつつ」「ゆめかうつつか」などと多く使うので、誤って》夢心地」の意に使われるようになった（同辞典）という、キミョウ(イ)な運命を負った言葉なのである。

「現つ」自体が、「夢うつつ」の意味を帯びてしまっている。本来、現―実というリアリティを表すべき言葉が、そのリアリティを希薄化してしまうといった現実感覚がそこにはあったということである。あるいは、

寝ても見ゆ寝(c)でも見えけり大方はうつせみの世ぞ夢にはあり　i　（藤原敏行『古今和歌集』）

と使われる「　　I　　」という言葉の使い方にしても同じである。この言葉は、「現身（うつしみ）」、つまり「現実の、この世の人」を意味するのであるが、それは「奈良時代には、はかないという意味は必ずしも持っていなかったが、平安時代以後は、蟬のぬけがらの意と解したので、はかないという意味になった」（同辞典）とされるものだからである。

こうした混用にもまた、確実に以上のような「ありてなければ」の現実感覚が影をおとしているだろう。この世の現実に生きる人がそのままに「空蟬のうつろ」を生きる人を含意しているのである。あらためていくつか例をあげて確認しておこう。

・巻向の山べとよみて行く水の水沫のごとし世の人われは　（柿本人麻呂『万葉集』）
・夢とこそいふ　ii　けれ世の中に現あるものと思ひ　iii　かな　（紀貫之『古今和歌集』）
・来し方の見し世の夢にかはらねば今も現の心地やはする　（西行『山家集』）
・無常変易のさかひ、有りと見るものも存ぜず、始あることも終なし、志は遂げず、人の心不定なり、物皆幻化なり。　（兼好法師『徒然草』）
・くすむ人は見られぬ　夢の夢の夢の世を　うつつ顔して／何せうぞ　くすんで　一期は夢よ　ただ狂へ　（『閑吟集』）
・露と落ち露と消えにしわが身かな浪速のことも夢の又夢　（豊臣秀吉）

万葉の昔から、日本人はこうした思いをかこち続けてきている。むろん時代ごとにその中味はそれぞれ異なっている。無常を語ることが、常なる浄土世界を喚び起こすことに結びついたり、またことさら詠嘆・感傷にたゆたったり、美感・芸道と結びついて彩られたりする時代もある。あるいは、隠遁（ウ）、漂白、徒然を導いたり、また浮かれ戯れる浮世感にかたちを変えることもある。

こうしたそれぞれをひとしなみにあつかうことはできないが、ただここでは、あえて時代をこえて、「ありてなければ」という現実感覚の問題として考えておきたい。むろんそれは、けっして過去のものではない。

さて、日本人はこうした無常感を背景に生きてきたし、また生きているのである。それはしかし、それゆえ、日本人の人生観や世界観は暗く消極的であるということをかならずしも意味しない。そこには不思議なほどの元気さ、明るさ、楽しさ、あるいは、感動、興趣といった、生きるにあたっての肯定的・積極的なあり方を見いだすことができるからである。

一例だけ、さきに挙げたものから『徒然草』の場合をとりあげ一瞥(エ)しておこう。

「有りと見るものも存ぜず、……物皆幻化なり」と説いた『徒然草』は、とりわけきびしい無常感を語っているもののひとつである。無常感は、「この世」のあらゆる部所にカンテツ(オ)し、それに代わるべき「あの世」といった特権的な境界の存在すら許さない。それもすべて無常によってスンダン(カ)・漂白されてしまうのである。『徒然草』において、無常とは死の同義語であり、それは次のように説かれる過激な認識であった。

春暮れてのち夏になり、夏果てて秋の来るにはあらず。春はやがて夏の気をもよほし、夏より既に秋は通ひ、秋はすなわち寒くなり、十月は小春の天気、草も青くなり、梅もつぼみぬ。……生老病死の移り来ること、またこれに過ぎたり。……死は前よりしも来たらず。かねてうしろに迫れり。

春が終わってから夏が来るのではない。また秋が終わってから冬が来るのではない。冬に小春が始まっているように、われわれの生死も、生のうちに既に死は始まっているのだ、死は行く手に待っているのではなく、「　Ⅱ　」っているのだ、と。

兼好は、われわれは春の日の雪だるまのように、もう既にどんどん下から溶け出しているという。ここでは、その無常の時間認識は、いつか暗転し下降するという時間としてよりも、端的に死として、この現時点の瞬間瞬間に立ち現れ、浸食し続けるものとして捉えられている。それは、今ここでの、未来にあるであろう消極的な結果の先取り、というより、今ここでの、今ここであるべき死の確認がなされているというべきである。

こうした、④きわめて深刻な無常感が展開されながら、しかし、その世界は意外にも明るく、楽しげでさえある。兼好は、たとえば「色を好まない男はだめだ」とか、「何ごとにも先達(キ)はほしい」「あまり受けようとするとかならず失敗する」「友とするにはこれこれがいい」とか、「これこれの茸は鼻にあてて嗅いではいけない。小さな虫が鼻から入ってしまう」、等々といったたぐいのことを次々と繰り広げてみせる。

そこには、しなやかで好奇心に満ち、あれこれ面白そうに活き活きと生きていたであろう人物像を思い浮かべることができる。「つれづれ」とは、まさにそうした兼好の生きざまをあらわす言葉であるが、「つれづれ」において人は、貪(ク)らず、頑張らず、硬直せずにのびのびと生きることが味わえるというのである。「縁をはなれて身を閑かにし、ことにあづからずして心をやすくせむこそ、暫く楽しぶともいひつ［ⅳ］」「存命の喜び、日々に楽しまざらんや」、と。

そして兼好は、このような生き方を可能にしたものが、他ならぬ上述のような無常感なのだ、と説く。ものごとが移り行かず人も死ぬことがなかったら、「いかにもののあはれもなからむ。世はさだめなきこそ、いみじけれ」。世の中は無常であるからこそ、「あはれ」「幽玄」「わび」「さび」等々といった、日本人の文学・芸術・芸能などの美意識の成立に、このような無常の認識が大きな役割を果たしていることはあらためて縷説(ケ)するまでもないだろう。

事柄はかならずしも同じではないが、この世の「むなしさ」を「いよよますます悲しかり［ⅴ］」と嘆いた大伴旅人は、一方で、酒を中心としたこの世の楽しみを存分に楽しみたいと歌い上げているし、「はかない」夢の世から覚め出ることを願い続けた西行は、同時に桜・月・恋への思いを歌い続けている。

あるいは「一期は夢よただ狂へ」と謳いとばすところに、「憂世」から「浮世」の浮かれ楽しむ活勢が可能になってきているし、「夢の又夢」とみずからの人生をソウカツ(コ)した豊臣秀吉の、あの野望に満ちた激越な行動力のあり方如何も、⑤みなある同じ問題関心で考えることができるだろう。

すなわち、日本人の無常感における、こうした、否定と肯定のあり方への問いとして、である。なぜ無常を、否定を語りな

がら、あるいは語ることによって、そこにかならずしも消極的ではない、積極的・肯定的な世界を展開しえたのであろうか。そうした思想構造そのものへの問いとして、である。

（竹内整一『「おのずから」と「みずから」』より）

問一　傍線部ア～コの漢字の読みをひらがなに、カタカナを漢字になおせ。

問二　空欄A・Bに入る枕詞を次から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア　ぬばたまの　　イ　ちはやぶる　　ウ　たらちねの　　エ　ひさかたの　　オ　あをによし　　カ　あらたまの

問三　波線部a～dを文意に即してわかりやすい現代語になおせ。

問四　空欄i～vには助動詞が入る。空欄i・iii・vには「けり」を、空欄ii・ivには「べし」を、それぞれ適切に活用させて入れよ。

問五　空欄Ⅰ・Ⅱに入る語句をそれぞれ文中から書き抜け。

問六　本文は途中で大きく転換する。次の文はその転換する直前の段落の最後に入る。この文が入る前の文の終わり十字を書き抜け。（。、「」なども一字とする）

「どうせ」を日常語にしているわれわれにおいて、それは今なおさまざまなかたちで見いだすことができる現実感覚だからでもある。

問七　傍線部①について、これを端的に表現した古語を文中から七字で書き抜け。

問八　傍線部②について、これと同じ意味の語句を文中から八字で書き抜け。

問九　傍線部③について、「現つ」という言葉の㈠何と㈡何が「同様」であるのか、それぞれ文中から漢字二字で書き抜け。また、この「同様の事情」とはどのような事情か、文中の言葉を用いて四十五字以内で説明せよ。（。、「」なども一字とする）

問十　傍線部④について、著者は無常を何だととらえているか、文中から漢字一字で書き抜け。

問十一　傍線部⑤について、これはどういった問題関心を指しているのか、文中の言葉を用いて説明せよ。

問十二　平安時代に作られた歌集を次から二つ選び、記号で答えよ。

ア　万葉集　　イ　古今和歌集　　ウ　金槐和歌集　　エ　新古今和歌集　　オ　山家集　　カ　閑吟集

令和７年度入学試験問題

数　　学

注　意　事　項

1. 試験開始の合図があるまで，この冊子を開いてはいけません。
2. 問題は，１ページから４ページまであります。
3. 解答はすべて別紙解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
4. すべての解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入しなさい。

1 以下の各問に答えよ。

問 1 多項式 $f(x)=x^3+ax^2+bx+1$ が $x-1$ で割り切れるとする。さらに，$f(x)$ が x^2-3x+2 で割り切れるとき，定数 a，b を求めよ。

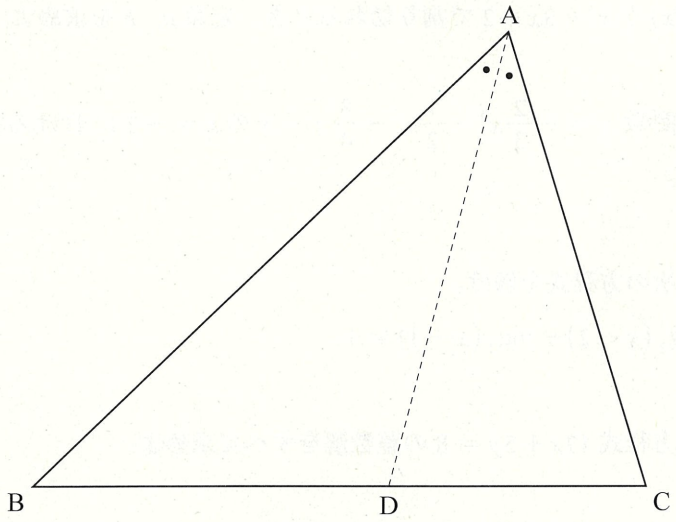
問 2 関数 $y=-\frac{2}{3}x^4-\frac{1}{2}x^3-\frac{3}{4}x^2-x$ の $x=-2$ における微分係数を求めよ。

問 3 次の方程式を解け。

$$\log_2(x-2)+\log_2(x-1)=1$$

問 4 方程式 $17x+5y=8$ の整数解をすべて求めよ。

2 以下の図のように，AB = 6，AC = 5，∠BAC = 60° の三角形 ABC において，∠A の二等分線と BC の交点を D とするとき，以下の各問に答えよ。



問 1 線分 AD の長さを求めよ。

問 2 三角形 ABD の面積を求めよ。

3 以下の各問に答えよ。

問 1 x, y が 3 つの不等式 $x+y \leqq 4$, $y \geqq -3x$, $-x+2y \geqq -7$ を満たすとき，$y+\dfrac{x}{2}$ の最大値および最小値を求めよ。

問 2 2 曲線 $y=2x^3-x^2+3$ と $y=x^2+ax+3$ が接するとき，定数 a を求めよ。また，その接点における共通の接線の方程式を求めよ。

4 以下の各問に答えよ。

問 1 袋の中に数字の 1 の書いてある球が 3 個，2 の書いてある球が 2 個，3 の書いてある球が 1 個，合計 6 個の球が入っている。この袋から同時に取り出した 2 個の球に書かれている数字の平均を X とするとき，その期待値を求めよ。

問 2 G が △ABC の重心ならば，△GBC，△GCA，△GAB の面積は等しいことを証明せよ。

問 3 正の整数 N を 6 進法，9 進法で表すと，それぞれ abc，cab となる。N を 10 進法で表せ。